

垂て巖の肩をうくも名所家に見へ傳ふ鵜
鴒などいふも小島の内はありや同記は
城の渡鴒とあり出羽の西尾^{また}浦あり
む城後必は屬しる所なればさもある
さ事なり又日本造史は渡鴒秋末來朝之
日所貢方相例に雜皮とあり是飛鴒ありあ
りさもの説なり飛鴒は昔より奥羽海濱
を貢として昔は誌歟なり又同記は渡鴒
秋二百余人來著部下氣仙郡とあり飛鴒
より吹浦との海上九里あり又加茂十又

里ありて冬中も順風のためになく渡海
あり西海より這の海路を経て東海の陸奥
より^とやよ^とはこ子細ありて彼は^と日
たぐは陸奥より出羽^と立降らん事隣玉を
まは磐石中よりたそ冠義^とさ事あり
あむむ又三代実録に見^と傳ふところ八十
被の衣解を^と出さ^とさちと^と度さ^と鴒ありあ
に元慶二年北条下に渡鴒秋末飛來^と倣我
武義化を來とあれむ^と玉中の鴒ありあむ
同元慶三年正月十一日の条下に夷首る二人